

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第二回

お高い電気が幸せを

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 第二回 お高い電気が幸せを

英国領バージン諸島の別荘を本拠にして驚いたことはたくさんあるが、そのひとつが電気料金。安過ぎる米国の感覚で使っていたから、初めての請求書に仰天した。

計算したら、1^{キワット}時で25^{セント}。当時米国では8^{セント}、日本でも20^{セント}を切っていたから、驚くのは当たり前。調べてみると、デンマークに次いで世界第2位の高料金だった。最近では40^{セント}前後だから、世界で一番高い電気かも知れない。

1960年代まで無電島だったからか、高い料金の文句など聞いたことがない。家のお手伝いさんは、暗い所でも「見えるから」と電燈を点けずに働く。「ありがたい」と節約する土地の人に倣おうと、せっせと節電を始めた。

まず家中の白熱電球を電球形蛍光灯に替えた。電気釜でご飯を保温などんでもない。テレビは見終わったら必ず元を切る。ステレオも同じこと。使わない部屋の電燈は必ず消す習慣もついた。

それでも毎月の請求書はあいかわらずお高い。その上、頻繁な停電が頭痛の種に加わった。

この島国は重油火力発電（総出力3万9000^{キワット}）に頼る。燃料はもちろん輸入だが、タンカーが入る港などない。沖に停泊する小型タンカーからパイプで送り込むから、シケが続けば停電になる。小国の悲しさで、タービン1機が故障しても、てきめん停電になる。そのタービンがロールスロイスのお古で調子が悪くなったらしい。新しいものに替えるまで2年かかるという事態が起きた。

再生可能エネルギーのことを初めて真剣に考えた。口では偉そうなことを言っても、家で実行したことがない。頭とハートが繋がっていないかった自分に気づいた。

動機は単純。抹茶アイスクリームを作っている最中、停電になってしまったのだ。ダイナーパーティーと夫の大好物がだいなしになって、やっと堪忍袋の

緒が切れた。

常夏の島のこと、太陽光線はふんだんにある。ペイバック期間が思ったより短かく、夫曰く「メンテナンスも自分でできる」からと、太陽光発電に決めた。

島の陽気な電気屋さんがやって来て「健康診断!」と、電気器具の電力使用量を監査した。電気を熱に変える湯沸かし器や、トースター、洗濯乾燥機、ヘアドライヤーなどは、電気の大食い。冷蔵庫と掃除機もばかにならない。驚いた。電気屋さんに「生活習慣を変えないと、この島どころか地球一個を食いつぶすぞ」と叱られた。

湯沸かし器にさようなら。気のせいか火で沸かす湯の味がいい。

トースターにも別れを告げた。ガスオーブンで焼く自家製のパンは、そのままが美味しい。イーストの香りを楽しみながら膨らむのを待つ時間が大好きになっただ。

もちろんコーヒーは手でドリップ。コーヒー党の夫がこんなに美味しいものだったかと感激した。

洗濯物は、嵐でも来ないかぎり外で乾かす。紫外線の殺菌・漂白効果に驚き、太陽の香りに幸せを感じた。漂白剤や柔軟剤ともおさらばだから、経済的だ。

ヘアドライヤーも消えた。自然乾燥の髪はさらりとご機嫌がいいし、夫の悩みもフケも消えた。

昼間余った電気は逆潮流で電力会社に売る。急に商売気を出した夫が、逆回りするメーターを見ては喜ぶ。冷蔵庫と掃除機だけは例外として、洗濯機を回すのも皿洗い機も、太陽と夫のご機嫌をうかがってからの習慣になった。

気がついたら家事嫌いだっただ私も夫も、家事が大好きになっていった。そして電気代が6割減った。

英国領とは言え、この島国の内政権は他の国と違わない。島民の生活は楽ではないが、電気料金設定に悪い政治介入などしない国。

お高い電気が、豊かな生活を運んでくれた。良い政治を選ぶ島民と常夏の太陽に、心底感謝する今日このごろ。幸せだ。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇八年五月二十八日付の電気新聞に、寄稿したものです。

著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。